雑木林通信 2021.2.8 158号

江戸の昔「横土手」をつくる

地名には、その地域の歴史が残されていることが多いものです。地名の起こりを探ってみると、その地域のくらしの出来事、人々の思い、願いがこめられていることがあります。今回、紹介するのもその一例です。

境川は、河川工事がなされる前は、クネクネとした川でした。ヘビが進むときに体をクネクネして進む形に似ていることから「蛇行(だこう)**」している川と呼ばれていました。**

また、境川には、大雨が降ればすぐにあふれる「暴れ(あばれ)**川」との異名がつけられていたと言います。**

『境川　流域ガイド』より　(H.22 相模原市発行)
改修前　蛇行する境川　　1942年撮影

話は、およそ280年前の江戸時代となります。

1742年(寛保2年)8月、例年にない大雨の日が続き、広く関東各地に川岸堤の決壊による洪水の被害がありました。ここ、小山も例外ではなく、境川の決壊、洪水により現在の片所、御嶽堂、横土手、沼、中村のあたり一帯は、大きな池のようになったと伝えられています。

（境川大水の記録については、『玉利軒（たまりや）日記』江戸のころの小山のくらし　発行:小山まほろば会 平成 17 年 で知ることが出来ます。）

当時の小山は農村で、田や畑での農作業を生業とする人々がほとんどでした。その耕地が水没してしまうのですから、苦しみは計り知れません。所によっては、一度、水没し池のようになると、くぼ地の所もあり元の田畑になるまでにかなりの日数が必要でした。

この惨状を見て、境川による被害が繰り返されることのないようにしよう、と声を上げたのが萩原四郎兵衛（1707～1789）**さんでした。**

萩原さんは、低地から土を積み上げていき、増水してもあふれないような土手をつくればいい、と村人に呼びかけたのです。しかしこの提案は農地をつぶされてしまうなど土手の位置決定で紛糾し、費用の困難さなどからすぐには成立しませんでした。

しかし萩原さんは、あきらめず、多大の私財を投じるなど村人の説得を続けました。その結果、土手工事が始まり「横土手」と呼ばれる川土手が出来たのです。（萩原四郎兵衛については、『堺村誌』昭和 50 年刊「第 11 章　郷土の先人　一、萩原四郎兵衛英純翁」に紹介されています）

築堤から 280 年。　現在、この土手の跡を確認することはできていませんが横土手の地名は残り萩原四郎兵衛さんを「境川翁」と呼んでその功績を伝える記録は残っています。